**第24課 ユダの共同体を更新するネヘミヤ 2018.6.17**

◎ 賛美(一同) : 聖歌651番(韓日444番）、聖歌423番(韓日363番)

◎ 信仰告白(一同) :使徒信条　◎御言葉朗読(一同) : ネヘミヤ13章6∼9節

◎ 本文朗読　◎主の祈り(一同):一番最後に

**◎ 今日のマナ**　ユダ共同体はネヘミヤのリーダーシップのもとで城壁の再建を完成させましたが、いまだ御言葉の中での成熟した信仰の姿を持つことは出来ていませんでした。ネヘミヤはこのように整えられていなかったユダの民を御言葉によって果敢に誤りを正しました。このようなネヘミヤの努力は、今日神様の子供として生きている私たちにも多くのことを悟らせてくれます。

**1. 聖殿をきよくした**

ネヘミヤは12年のエルサレム総督任期を終え、ペルシヤに帰りました。しかし、ネヘミヤがいなくなった間にエルサレムでは再び神様に不従順することが繰り広げられました。ペルシヤでこのうわさを聞いたネヘミヤは、再びエルサレムへと行きユダの共同体を御言葉によって誤りを正し、新しくしました。この時に行ったネヘミヤの働きの内容がネヘミヤ記最後の章である13章全体に渡って登場しますが、大きく4つに分けることが出来ます。

一番目に、聖殿をきよくしました。ネヘミヤが離れていた間に祭司エルヤシブは大きな罪を犯しました。本来、聖殿の器具とレビ人の食糧を置いておくのに使われていた部屋を、当時の有力者であったアモン人トビヤの部屋へと変えてしまったのです(ネヘミヤ13:4∼5)。ネヘミヤはエルサレムに到着するとすぐにトビヤを部屋から追い出し、再び本来の用途へと戻しました。

トビヤを追い出したこの出来事は、聖殿は必ずきよくなくてはならないことを私たちに教えています。聖殿はどのような不純なものもあってはならず、ただ神様の栄光のみ充満でなくてはいけない場所です。だとするならば、クリスチャンにとって聖殿とは何を意味するのでしょうか。それはまさに私たちの心です(Ⅰコリント3:16)。ネヘミヤがトビヤを完全に追い出したように、私たちも心の内に神様の御心に反するものを完全に追い出し、ただ聖霊によってのみ充満に満たさなくてはいけません。

**2. 十一条の定めを正しくした**

二番目に、十分の一の定めを正しくしました。当時無知であったユダの民は十分の一を正しく捧げていませんでした。それによってレビ人たちは生計を解決することが出来ずにばらばらに散らばり、聖殿の礼拝は空白が生まれてしまいました(ネヘミヤ13:10∼11)。これに対しネヘミヤは民たちを叱り、再び十分の一を宝物倉に捧げるようにし、レビ人を聖殿に呼び戻し礼拝を回復させました。

旧約において十分の一の捧げものは礼拝を主幹するレビ人の生計(民数記18:21)、聖殿の運営(申命記14:23)、貧しい民の救済(申命記14:28-29) このように三つの目的で用いられました。十分の一によってレビ人は礼拝に集中し、聖殿は安定し、貧しい人々は助けを受けることができました。このような十分の一の役割は今日も同じく適用されます。また何よりも十分の一は私たちの信仰の告白が込められているゆえに重要です。イエス様は“あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです。”(マタイ6:21)と言われました。私たちの物質を何にどれほど使うのかは、私たちの心がどこにあるのかを知らせる指標となります。従って、十分の一は単純に物質を捧げるのではなく、神様に向かう私たちの心を捧げることなのです。

**3. 安息日をきよく守らせるようにした**

三番目に、安息をきよく守らせるようにしました。十戒によると安息日にはイスラエルの人々は彼らのしもべ、客、そして家畜さえも決して働いてはなりませんでした(出20:8～11)。しかし、ネヘミヤが離れた間にユダの民たちは安息日に農作をし、商売をし、外国人たちもエルサレムに入り物を売り買いしていました(ネヘミヤ 13:15～17)。これを見たネヘミヤは民たちを厳しく叱り、どのような人も安息日に働くことができないように措置を取りました(ネヘミヤ13:18∼22)。

安息日は、6日間天地を創造された神様が７日目に安息された創造の秩序を覚え、すべての民が行っていた仕事をやめて、神様を礼拝する日です。イスラエルの人々は安息日をきよく守ることによって、自分たちがこの世と区別された聖なる民であることを確認し、肉体の休息を享受し、一週間の一日をただ神様にだけ集中することが出来たのです。

安息日はクリスチャンたちの主日と類似しています。私たちは主日を旧約時代の時の安息日のように律法として守る必要はありませんが、主日を守るということは、神様に私たちの時間を差し上げる献身であり、生活の中心が神様にあるということをお見せする信仰告白であります。主日を守ることは十分の一に加えて私たちの信仰の深みを決定する重要な尺度であります。主日をきよく守らなくてはいけません。

**4. 異邦人との婚姻を整理した**

４番目に異邦人との婚姻を整理しました。異邦人との婚姻はイスラエルの歴史の中で絶えず行われた重大な罪の中の一つでした。ソロモンは異邦人との婚姻によって崩れ、アハブ王が妻として迎えたシドンの女イゼベルによって全イスラエルが危機に置かれました。

ネヘミヤは新しく始まるユダの共同体が再び先祖たちの罪を犯すことで神様からの裁きを受けてはいけないゆえに、異邦人との婚姻を決して許しませんでした(ネヘミヤ13:26∼27)。

神様が異邦人の配偶者を禁じられたのは、イスラエルが罪によって染まることを防ぐためでありました。私たちは恵みの時代を生きているゆえ、この律法を未信者との結婚禁止とまで解釈する必要はありません。しかし異邦人との婚姻の禁止は、私たちが霊的な純潔さを守らなくてはいけないことを悟らせてくれます。キリスト者にとって霊的な純潔、すなわち‘たましいの幸い’ほどに重要なことはありません。日々神様の前で純潔を守り、この世において影響力を及ぼし、健康の祝福、環境の祝福も享受する私たち全てにならなくてはいけません。

◎ マナの要約

<聖殿をきよくした>

1. ネヘミヤのいない間に再び不従順するようになったユダの民を立ち返らせるためにネヘミヤが再びエルサレムへと下ってきました。

2. ネヘミヤは聖殿からトビヤを追い出すことで聖殿をきよくしました。

3. 神様の聖霊が住まわれる私たちの体をいつもきよくしましょう。

<十一条の定めを正しくした>

1. ネヘミヤはユダの民の十分の一の定めを正しく守らせ、礼拝を回復しました。

2. 十分の一は礼拝のための捧げものであるだけでなく、私たちの信仰告白です。

<安息日をきよく守るようにした>

1. ネヘミヤは安息日を守らないユダの民を叱り、安息日をきよく守るようにしました。

2. 主日を守ることで私たちの人生の中心が神様にあるということを示しましょう。

<異邦人との婚姻を整理した>

1. ネヘミヤは異邦人との婚姻を整理しました。

2. 心と生活の不純物を取り除き、神様の前で純潔を守らなくてはなりません。

◎ 生活の中のマナ

<隣の人と挨拶>

1. 私たちのたましいをきよく守りましょう。2. 十分の一信仰を告白しましょう。3.主日を守りましょう。

<祈り>1. 神様の聖殿である私たちの心を聖霊充満にしてくださいと祈りましょう。

2. 神様に対する感謝と愛をこめて十分の一を捧げるようにしてくださいと祈りましょう。

3. 一週間の中で一番重要な日が主日であることを覚え、主日ごとに神様に深く出会えるようにと祈りましょう。

<とりなしの祈り>隣の人と祈りの課題を分かち合い、共に祈りましょう。